

## 2016 年度 IR 専門委員会活動報告書の公表にあたって

本学では、2014 年度に自己点検・評価委員会のもとに IR 専門委員会が組織され、IR 機能を担う基盤作りが始まりました。その後 2 年の活動を経て、今年 4 月には学長直属の組織として IR 推進室を設置し、IR の機能強化と体制整備を図りました。IR 推進室は、教学データの収集・分析を行い、分析結果は IR 専門委員会での審議を経て、学内の関係組織に報告しております。

また、本学は、2014 年度に文部科学省平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム (AP)」テーマ (学修成果の可視化) に採択され、本学のリベラル・アーツ教育の学修成果を可視化し、アセスメント・モデルを構築する事業に取り組んでいます。IR 専門委員会は、本事業を推進すべく、教学データの統計分析の一端を担っております。

教学データの分析結果は、そのデータの性質上、学外に公表できる内容は限られますので、今回は、2 年次から 4 年次の学生を対象に毎年 4 月の学年始業時に行っているアンケート (以下「在学生アンケート」と表記) の分析結果の一部をご報告いたします。

大学を取り巻く環境が激しく変化する時代にあって、本専門委員会の役割はますます重要になることでしょう。今後も、客観的データに基づいた教学改革に資する活動を続けてまいりたいと思っております。

ご高覧いただけましたら幸いです。

2016 年 8 月

東京女子大学 IR 専門委員会

## 2016 年度実施の 2～4 年次アンケート調査の結果報告

本学では、毎年 4 月のオリエンテーション時に、新 2 年次、新 3 年次、新 4 年次を対象とした「教育・学生生活に関するアンケート調査」（以下「在学生アンケート」と表記）を行っている。このアンケート調査は、在学生が本学の教育内容や学生生活についてどのような意識を持っているのか、また本学学生の学修実態などを明らかにすることで、今後の教育改善に活かすことを目的としている。ここでは、主に項目の分析結果を中心に報告する。

なお、本調査は本学在学生全員を対象とした全数調査（後述の通り回収率は 8 割程度であるが）であるため、本来統計検定は必要ないが、参考のため、分析結果の報告の中で適宜検定結果も合わせて報告していくことにする。

調査概要は以下の通りである。

目的：東京女子大学に通っている学生の学習及び大学生活に関する意識・実態調査

方法：質問紙調査

対象：東京女子大学に在籍している 2～4 年次学生、2911 名

（うち：2 年次学生 1001 名、3 年次学生 937 名、4 年次学生 973 名）

調査時期：2016 年 4 月 1 日～2016 年 4 月 25 日

有効回答数：2410 名

（うち：2 年次学生 868 名、3 年次学生 779 名、4 年次学生 763 名）

有効回答回収率：82.8%<sup>\*1</sup>

（うち：2 年次学生 86.7%、3 年次学生 83.1%、4 年次学生 78.4%）

調査項目：2015 年度までに実施してきた調査結果を踏まえ、「学習」、「学生生活」、「課外・学外の活動」、「図書館」、「その他施設」などの項目で構成している

<sup>\*1</sup>：過去 4 年間の回収率（2～4 年次学生全体）を表 1 に示す。回収率はすべての年度において、8 割を超えている。

表 1. 2・3・4 年次アンケート回収率

2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度
80.2%	80.1%	82.2%	84.8%	82.8%

(1) 授業に対する満足度について

以下の3つのカテゴリー別に、過去1年間の学修を通じての授業に対する満足度を尋ねたところ、表2に示すような結果となった。「満足している」と「やや満足している」を合計した割合は、いずれの項目でも9割近い数字となっており、授業に対する満足度は全般的に高いと言ってよい。

表2 授業に対する満足度

	満足している	やや満足している	あまり満足していない	満足していない	履修していない
	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)	
授業全般	19.4 (458)	70.5 (1662)	9.4 (222)	0.6 (15)	
全学共通カリキュラムの科目の授業	19.2 (453)	67.1 (1581)	11.7 (275)	1.3 (30)	0.8 (18)
学科科目(専門)の授業	27.3 (644)	62.4 (1473)	9.0 (213)	0.8 (18)	0.5 (11)

注：それぞれの項目について欠損値(51~53人)は除いて集計した。

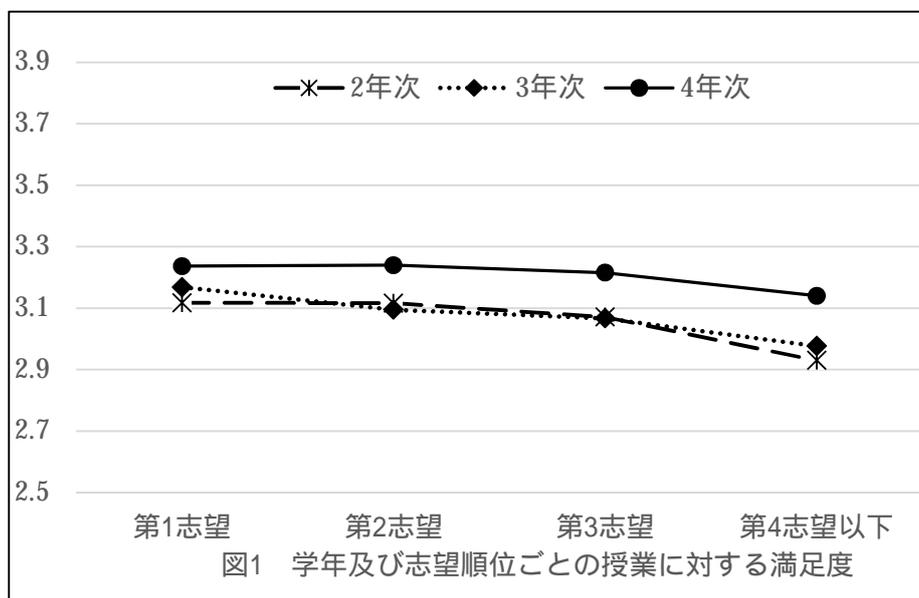
もう少し詳しく見ていくため、「満足している」=4、「やや満足している」=3、「あまり満足していない」=2、「満足していない」=1とし、「履修していない」は欠損値扱いにして、上記3項目の得点を合計し項目数で割った項目平均(M=3.10, SD=0.52, 最大=4, 最小=1; 因子分析で次元性も確認。=.85)を算出した(以降「授業満足度得点」とする)。その得点をまず専攻別に見てみる(表3)。

表3 専攻別にみた授業に対する授業満足度得点

専攻名	平均値	標準偏差	人数
哲学	3.23	.478	91
日本文学	3.17	.497	258
英語文学文化	3.08	.549	293
史学	3.19	.508	187
国際関係	2.93	.501	313
経済学	3.12	.503	173
社会学	3.11	.518	175
心理学	3.19	.443	209
コミュニケーション	3.07	.525	255
言語科学	3.14	.526	211
数学	3.05	.509	87
情報理学	3.01	.532	82
全体	3.10	.515	2334

表3に示す通り、1専攻を除いて（この専攻でも  $M=2.93$  と高い値ではある）いずれの専攻でも満足度得点の平均値は3を超えている。なお、参考のため行った分散分析の結果、 $F(11,2322)=5.78, p < .001$ 、と統計的に有意差が見られたが、効果量を見ると  $\eta^2=.027$  であり、授業満足度得点に関する専攻間の違いはさほど大きいものではないことがわかる。

次に、学年及び入学前の本学に対する志望順位で授業満足度を比較してみたところ、図1に示すとおり、学年や志望順位により多少の違いはあるものの、顕著な差は見られなかった。ここでも、一応参考のため2要因分散分析を行ったところ、学年 ( $F(2,2307)=17.77, p < .001, \eta^2=.015$ ) および志望順位 ( $F(3,2307)=13.75, p < .001, \eta^2=.018$ ) それぞれの主効果が有意であり、学年別に見ると4年次の学生が他の二つの学年より満足度が若干高い。また、入学前の本学の志望順位が高いほど、満足度も高い傾向にあった。しかし、いずれも効果量は小さく、実質的に意味のある差があるとは言い難い。なお、この二つの変数の交互作用は見られなかった ( $F(6,2307)=.69, p=.657, \eta^2=.002$ )。



## (2) 身についた「スキル」に関する項目の集計・分析結果

昨年1年間の学びを通じてどのようなスキルが身についたと感じているかを調べるため、「学術的な文献の読解力」、「人の話を聞いて、要点をつかむスキル」、「プレゼンテーションにおいて、効果的に話をするスキル」、「ディスカッションにおいて、論理的に意見を述べるスキル」、「論理的でわかりやすい文章を書くスキル」、「わかりやすいプレゼンテーション資料を作成するスキル」、「パソコンで図表を作成するスキル」等の9項目について、「全くそう思わない」(=1)から「非常にそう思う」(=4)の4件法で尋ねた。

その結果、図2に示すとおり、どの項目でも肯定的回答の割合(「非常にそう思う」と「そう思う」の合計)が5割を超えているが、特に「人の話を聞いて、要点をつかむスキル」、「課題に応じて、適切な資料を収集するスキル」、「相手や場面に応じたコミュニケーションスキル」の3項目については、肯定的回答の割合が7割を超えていた。一方、「プレゼンテーションにおいて、効果的に話をするスキル」、「ディスカッションにおいて、論理的に意見を述べるスキル」、「パソコンで図表を作成するスキル」、「わかりやすいプレゼンテーション資料を作成するスキル」で若干肯定的回答の割合が低く、これらの項目については、今後様々な角度から改善策を考える必要があるだろう。

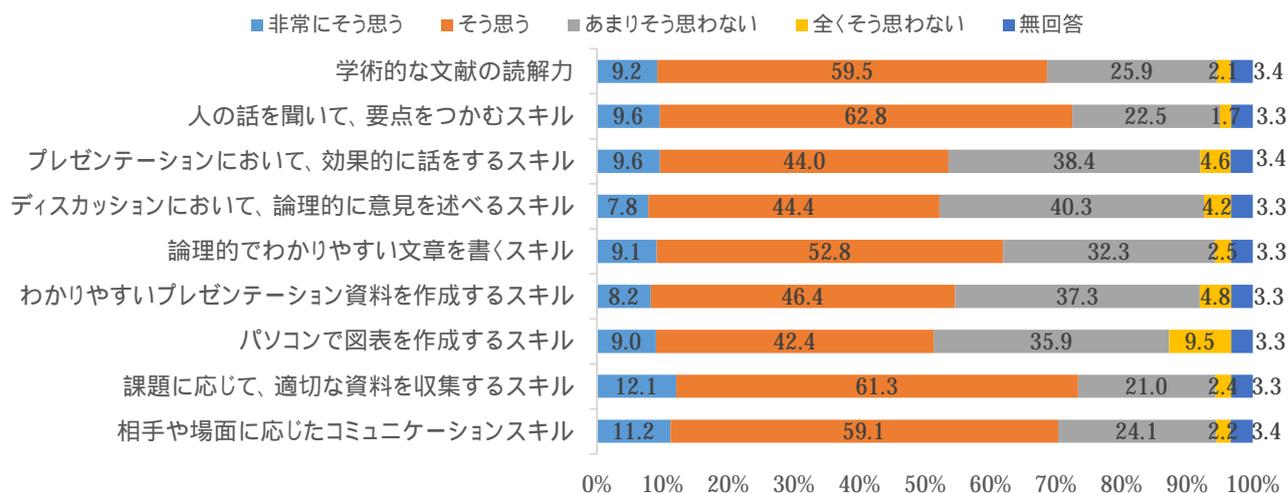


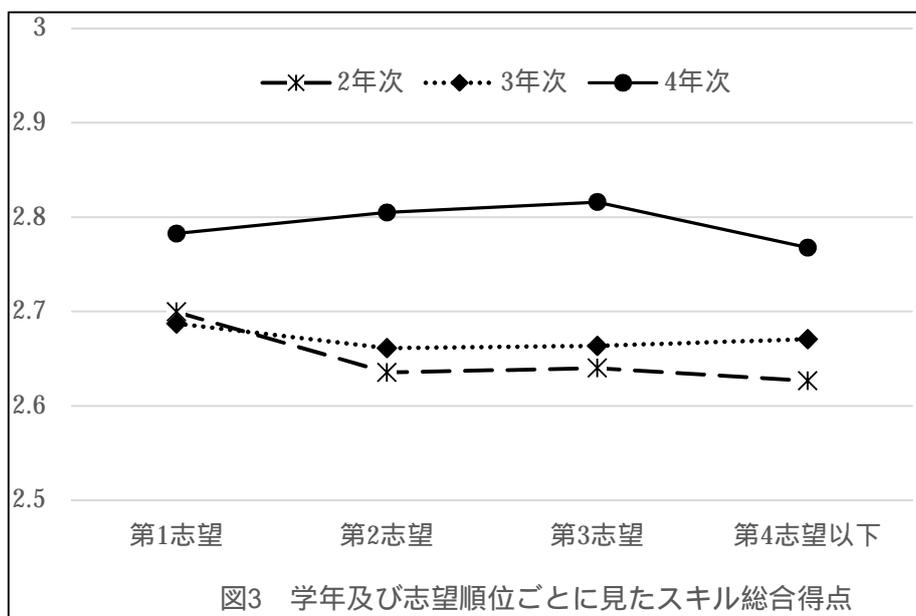
図2 それぞれのスキルについて昨年1年間で身についたかどうかの回答分布

これら9項目に対して因子分析を行った結果、1次元構造であることが明らかとなった。そこで、この9項目の得点を合計しそれを項目数で割った項目平均を算出し「スキル総合得点」(M=2.70, SD=.488, 最大=4, 最小=1,  $\alpha=.88$ )として以降の分析で用いることにする。

まず、このスキル総合得点を専攻別に見てみたところ、一番低い専攻で M=2.48 (SD=.611)、一番高い専攻で M=2.80 (SD=.506) と専攻間で若干得点に差が見られた。しかし、これは今回尋ねた9つのスキルが、すべての専攻で必ずしも同等に伸ばせるものではなかったからかもしれない。いずれにせよ、相対的に平均値が低めの専攻でも、スキルが身についたと感じている学生自体は決して少なくない。

次に、このスキル総合得点を学年及び入学前の本学志望順位で比較してみた(図3参照)。ここでも、

参考のため2要因分散分析を行ったところ、学年 ( $F(2,2298)=17.30, p < .001, \eta^2=.015$ ) の主効果のみが有意で、学年別に見ると4年次の学生が他の二つの学年よりスキル総合得点が若干高いが、効果量はそれほど大きくはない。なお、志望順位 ( $F(3,2298)=.632, p=.595, \eta^2=.001$ ) 及び交互作用は有意ではなかった ( $F(6,2298)=.442, p=.851, \eta^2=.001$ )。つまり、入学前の本学に対する志望順位が高いか低いかに関わらず、身についたと感じるスキルには違いは見られず、学年の違いだけが多少見られた。



また、この「スキル総合得点」と、先に述べた「授業満足度得点」との相関は  $r = .31$  ( $p < .001$ ) で、スキルが身についたと感じている学生ほど、授業の満足度が高い傾向にはあったが、その関連はそれほど強いものではなかった。

### (3) 身についた「能力」に関する項目の集計・分析結果

次に、昨年1年間を通じて、図4に示す14項目の能力が身についたかどうかを尋ねた結果を報告する（実際のワーディングは「あなたは、昨年1年間の学びを通じて以下の能力等を養うことができたと思いますか」で、選択肢は「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の4件法）。それぞれの能力が身についたかどうかについては、一部の項目を除いて全体的に肯定的回答（「非常にそう思う」+「そう思う」）が7割前後と多く、大半の学生が様々な能力を身につけることができたと感じていることがわかる。最も肯定的回答の割合が高かったのは「課題に応じ、収集した情報を、効果的に活用する力(74.9%)」であった。次いで肯定的回答の割合が高かった項目は「人間関係を築いたり調整したりする力(73.2%)」、「状況を的確に判断する力(72.2%)」などであった。

一方、「リーダーシップ」については、肯定的回答の割合が46.0%と相対的に低めであり、今後この能力をさらに伸ばしていく工夫が必要であろう。ただ、これに関連する項目と考えられる「主体的に行動する力」や「人間関係を築いたり調整したりする力」については肯定的回答が6割を超えてはいた。

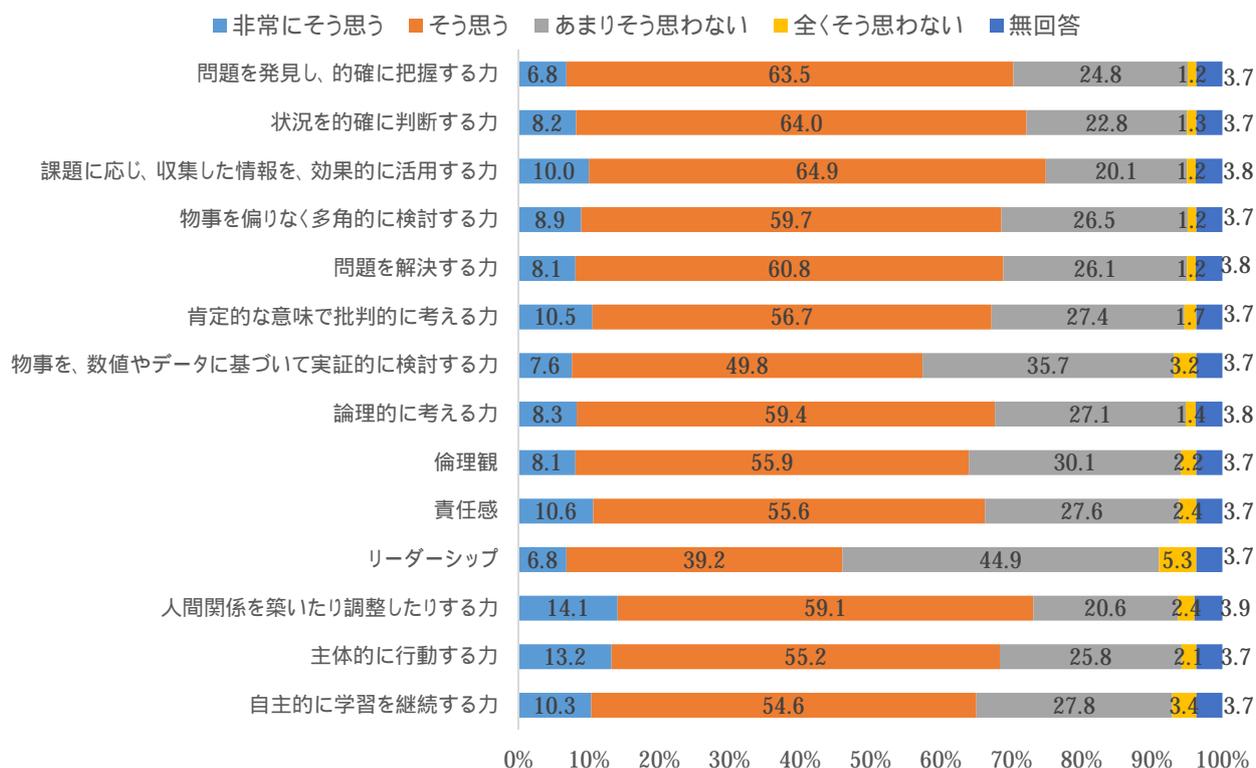


図4 昨年1年間で養うことができた能力等

もう少し詳しく分析するため、まずこれら14項目に対して、「非常にそう思う」=4、「そう思う」=3、「あまりそう思わない」=2、「全くそう思わない」=1として（無回答は除いた）、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った結果、固有値1以上を基準で2因子が抽出された（表4参照）。

第1因子には、「問題を発見し、的確に把握する力」、「論理的に考える力」、「課題に応じ、収集した情報を、効果的に活用する力」など、問題や課題を発見し解決するための能力に関する項目が高い負荷量を持っていたので、この因子は「問題発見・解決力」と解釈できる（「倫理観」のみ、やや異質

であるが)。第2因子では「人間関係を築いたり調整したりする力」、「主体的に行動する力」など、主体的な行動力を必要とする項目の因子負荷量が高かったため、この因子を「主体性」因子と命名した。

次に、第1因子に負荷量の高かった9項目の得点を合計し項目数で割った「問題発見・解決力得点」(M=2.78, SD=.468,  $\alpha=.91$ )を作成した。同様に、第2因子に負荷量の高かった5項目の得点を合計し項目数で割った「主体性得点」(M=2.74, SD=.544,  $\alpha=.86$ )を作成し、以降の分析に用いる。

表4 身について能力に関する項目の因子分析結果(最尤法、プロマックス回転)

	F1	F2	共通性
問題発見・解決力 ( $\alpha=.91$ )			
問題を発見し、的確に把握する力	<b>0.798</b>	0.000	0.636
論理的に考える力	<b>0.765</b>	-0.010	0.574
状況を的確に判断する力	<b>0.715</b>	0.077	0.600
物事を偏りなく多角的に検討する力	<b>0.703</b>	0.043	0.541
課題に応じ、収集した情報を、効果的に活用する力	<b>0.699</b>	0.046	0.539
物事を、数値やデータに基づいて実証的に検討する力	<b>0.669</b>	-0.037	0.412
肯定的な意味で批判的に考える力	<b>0.634</b>	0.061	0.463
問題を解決する力	<b>0.625</b>	0.167	0.577
倫理観	<b>0.497</b>	0.211	0.449
主体性 ( $\alpha=.86$ )			
人間関係を築いたり調整したりする力	-0.052	<b>0.835</b>	0.634
主体的に行動する力	0.014	<b>0.808</b>	0.669
リーダーシップ	0.020	<b>0.697</b>	0.508
責任感	0.145	<b>0.613</b>	0.531
自主的に学習を継続する力	0.319	<b>0.405</b>	0.461
		因子間相関 $r = .756$	

表5 身について能力に関する学年別比較

		度数	平均値	標準偏差	
問題発見・ 解決力得点	2年次	841	2.70	.477	F(2, 2307) = 42.21, $p < .001$ $\eta^2 = .035$
	3年次	738	2.74	.451	
	4年次	731	2.90	.449	
	合計	2310	2.78	.468	
主体性得点	2年次	841	2.66	.541	F(2, 2311) = 38.27, $p < .001$ $\eta^2 = .032$
	3年次	738	2.70	.525	
	4年次	735	2.88	.539	
	合計	2314	2.74	.544	

注：多重比較(Scheffe法)の結果、いずれの得点も4年次生が2~3年次生より有意に高かった。

表5に示したとおり、問題発見・解決力得点および主体性得点のいずれも、4年次生が2年次生や3年次生より若干高かった。2年次生と3年次生の間には得点差は見られなかった。4年次生と2年～3年次生の得点差は必ずしも大きいわけではないが、最終学年にこうした能力が一番伸びる傾向にあることが明らかになった。

なお、この問題発見・解決力得点および主体性得点について、専攻の違い、入学前の志望順位との関連も調べてみたが、いずれについても関連は見られなかった。

参考のため、専攻別に問題発見・解決力得点を示しておく(表6)。

表6 専攻別にみた問題発見・解決力得点

専攻名	人数	平均値	標準偏差
哲学	92	2.86	.437
日本文学	250	2.84	.480
英語文学文化	285	2.74	.452
史学	185	2.82	.423
国際関係	309	2.74	.476
経済学	167	2.75	.468
社会学	177	2.81	.475
心理学	205	2.79	.454
コミュニケーション	255	2.78	.442
言語科学	214	2.77	.442
数学	88	2.75	.550
情報理学	83	2.65	.607
合計	2310	2.78	.468

#### (4) 身についた「技術」に関する項目の集計・分析結果

今回の調査では、さらに図5にあるような13項目について、過去1年間の学びを通じて身につけることができたと思うかどうかを尋ねた。この図にあるとおり、肯定的な回答が7割～8割程度と高い項目が多かった。例えば、「日々の学習の中で、自分の興味や関心の持てる分野を見つけ出す姿勢」を尋ねた項目では75.6%の学生が肯定的な回答をしており、学生自身が積極的に学習に参加する力を身につけていたようだ。また、「文献や資料を見つけ出すために、インターネットを活用する技術」、「文献や資料を、図書館で探す技術」の、自分が必要な情報を探す技術は2項目とも、約78%と高い割合で肯定的回答が多かった。1年次オリエンテーションでの図書館見学や、1年次必須情報探索ガイダンスなどの大学の様々な取り組みの成果が現れているといえよう。

また、「書式及び体裁の整ったレポートを作成する技術(78.0%)」、「レポート作成やプレゼンテーション時に、著作権を尊重し、適切に引用するスキル(75.9%)」のレポート作成に関する2項目も肯定的回答が7割を超えており、レポート作成時の基礎的なスキルが身につけている学生が多いこともわかる。

ただ、「相手に伝わるような論理的な構成のプレゼンテーションを行う技術」、「他者と積極的に意見を交換しながら、活発なディスカッションを行う能力」の2項目については、身についたと思うと回答した割合が若干低めであった。

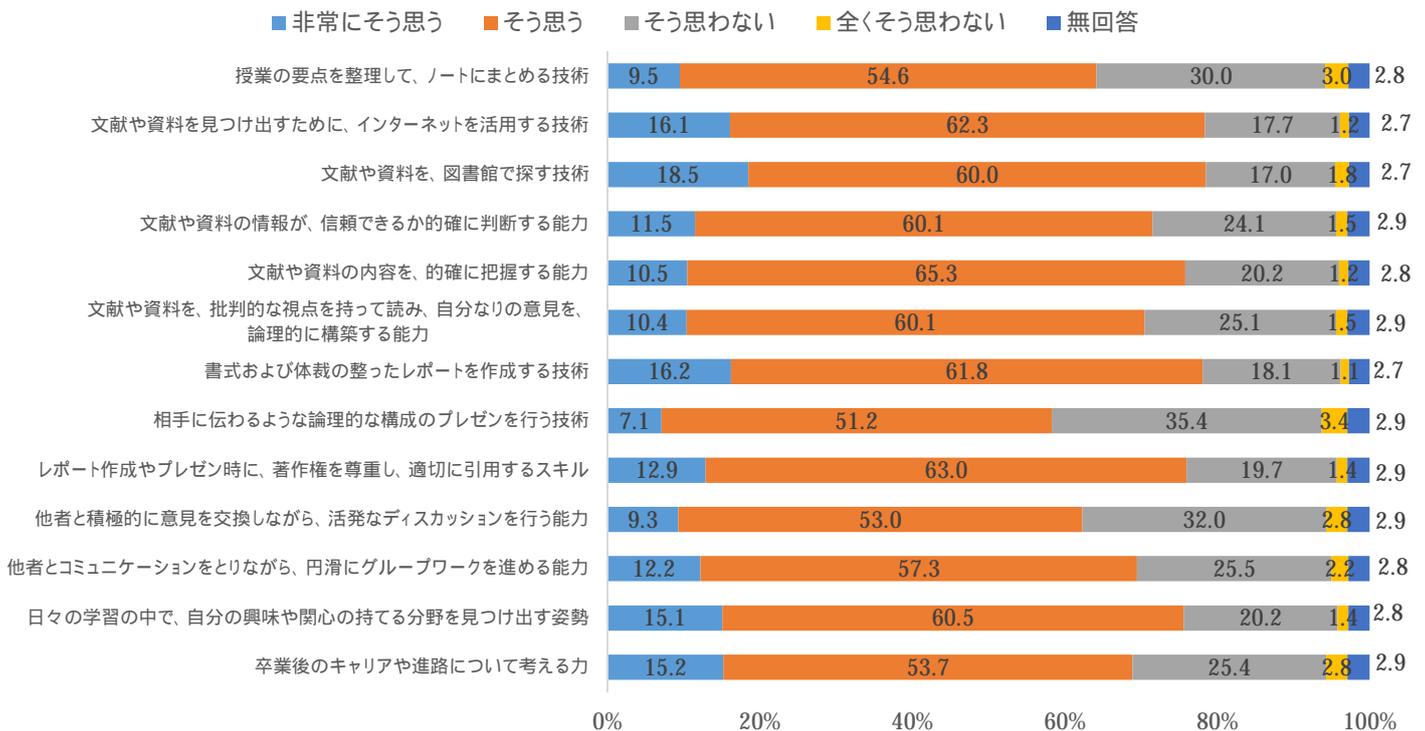


図5 昨年1年間で身についたと思う技術など

次に、これら13項目について、(無回答を除き)「非常にそう思う」=4、「そう思う」=3、「あまりそう思わない」=2、「全くそう思わない」=1として、因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った結果、固有値1以上を基準で2因子が抽出された(表7参照)。

第1因子には、「特定のテーマに関する文献や資料を、図書館で探す技術」、「収集した文献や資料の内容を、的確に把握する能力」、「書式および体裁の整ったレポートを作成する技術」など、授業の課題を進めるための能力に関する項目の因子負荷量が高かったため、この因子は「情報探索・処理に関する能力や技術」を表すものと解釈できる。第2因子では「他者とコミュニケーションをとりながら、円滑にグループワークを進める能力」、「他者と積極的に意見を交換しながら、活発なディスカッションを行う能力」、「卒業後のキャリアや進路について考える力」、「日々の学習の中で、自分の興味や関心の持てる分野を見つけ出す姿勢」など学生生活を送る上で必要な項目に因子負荷量が高かったため、この因子を「学生生活スキル」と命名した。

第1因子に負荷量の高かった9項目の得点を合計し項目数で割った「情報探索・処理得点」(M=2.88, SD=.461,  $\alpha=.87$ )を作成した。同様に、第2に負荷量の高かった5項目の得点を合計し項目数で割った「学生生活スキル得点」(M=2.78, SD=.526,  $\alpha=.84$ )を作成し、以降の分析に用いる。

表7 身につけることができたと思う技術に関する項目の因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

	F1	F2	共通性
情報探索・処理に関する能力や技術（ $\alpha=.87$ ）			
特定のテーマに関する文献や資料を、図書館で探す技術	<b>0.837</b>	-0.138	0.561
収集した文献や資料の内容を、的確に把握する能力	<b>0.756</b>	0.060	0.637
特定のテーマに関する文献や資料を見つけ出すために、オンライン・データベース、ウェブサイト等、インターネットを活用する技術	<b>0.752</b>	-0.099	0.472
収集した文献や資料の情報が、信頼できるものかどうかを的確に判断する能力	<b>0.723</b>	0.039	0.563
収集した文献や資料を、批判的な視点を持って読み、自分なりの意見を、論理的に構築する能力	<b>0.542</b>	0.259	0.555
書式および体裁の整ったレポートを作成する技術	<b>0.520</b>	0.205	0.460
レポートの作成やプレゼンテーションの際に、著作権を尊重しつつ、適切に引用を行うスキル	<b>0.398</b>	0.303	0.416
授業の要点を整理して、ノートにまとめる技術	<b>0.364</b>	0.158	0.237
学生生活スキル（ $\alpha=.84$ ）			
他者とコミュニケーションをとりながら、円滑にグループワークを進める能力	-0.133	<b>0.889</b>	0.645
他者と積極的に意見を交換しながら、活発なディスカッションを行う能力	-0.097	<b>0.878</b>	0.663
相手に伝わるような論理的な構成のプレゼンテーションを行う技術	0.127	<b>0.603</b>	0.485
卒業後のキャリアや進路について考える力	0.172	<b>0.492</b>	0.388
日々の学習の中で、自分の興味や関心の持てる分野を見つけ出す姿勢	0.267	<b>0.487</b>	0.488
		因子間相関 $r=.688$	

表 8 に示すとおり、情報探索・処理得点および生活スキル得点と学年との関係を見ると、4 年次生の得点が 2～3 年次生の得点より若干高いことがわかる。ただ、この場合もその違いはそれほど顕著ではない。

表 8 身についた技術に関する学年別比較

		度数	平均値	標準偏差	
情報探索・処理得点	2年次	852	2.83	.452	F(2, 2332) = 24.61, $p < .001$ $\eta^2 = .021$
	3年次	740	2.84	.453	
	4年次	743	2.98	.463	
	合計	2335	2.88	.461	
生活スキル得点	2年次	855	2.71	.517	F(2, 2335) = 33.39, $p < .001$ $\eta^2 = .028$
	3年次	741	2.74	.513	
	4年次	742	2.91	.527	
	合計	2338	2.78	.526	

注：多重比較（Scheffe法）の結果、いずれの得点も4年次生が2～3年次生より有意に高かった。

次に、情報探索・処理得点および生活スキル得点と本学志望順位との関係を見ると情報探索・処理得点にのみ、多少の関連がみられた。表11に結果を示す。今回も、参考のため統計検定にかけると有意差が見られるが、効果量を見る限り決して大きな違いではないことがわかる。

表 9 情報探索・処理得点の本学志望順位、入試選抜方式別の比較

		度数	平均値	標準偏差	
志望順位	第1志望	663	2.93	.437	F(3, 2316) = 4.75, $p < .01$ $\eta^2 = .006$
	第2志望	432	2.88	.442	
	第3志望	406	2.90	.442	
	第4以下	819	2.84	.493	

注：多重比較（Scheffe法）の結果、第1志望と第4志望以下の間に有意差あり。